かわじ　だいみょうじんばらいせき

川路大明神原遺跡

―個人住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

かわじ　だいみょうじんばらいせき

川路大明神原遺跡

―個人住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市川路地区は、飯田市の南端に位置し、天竜川の右岸一帯に河岸段丘や沖積地が広がる地形的な特徴があります。

このような地形を利用して、私たちの祖先は生活を営み、その痕跡が遺跡として現代に残されてきています。これらは私達の地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のままで後世に伝えていくことが私たちの責務であります。

川路地区は、三遠南信道や県道バイパス工事が進み、宅地化が急速に進みつつあります。今次調査も、県道バイパスによる住宅移転が要因となっています。しかし、この一帯には、三遠南信道路に先立つ調査で、縄文時代中期を中心とする集落や、集落の縁辺部から落とし穴などが見つかり、縄文時代の集落景観が判明しつつある重要な地域です。このため、関係各機関と協議の結果、工事実施に先立って発掘調査を行って、記録保存を図ることとなりました。

調査結果については本文に述べてあるとおりですが、今回の調査では、縄文時代中期後半の集落の一部が確認され、飯伊地区でも拠点的な集落の一つであることが判明しつつあります。調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料になると確信しています。

最後になりましたが、調査の実施に当たり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただいた施主の塩沢様、調査に関係されたすべての皆様方に深く感謝申し上げます。

平成20年３月

飯田市教育委員会
教育長　伊　澤　宏　爾

例　言

1．本書は宅地開発等によって破壊される遺跡の記録保存を図るため、国の補助を受けて平成18年度に実施した市内遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2．本書の内容は、市内遺跡緊急調査のうち個人住宅建設に先立つ川路大明神原遺跡の調査結果である。

3．調査は、飯田市教育委員会の直営事業として、平成18年度に現地作業を行い、平成19年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。

4．調査実施にあたり、基準点測量を有限会社エムツークリエーションに委託した。

5．発掘作業及び整理作業にあたり、遺跡略号をKDMとして使用し、調査個所の中心地番である5236－10を略号に附して使用した。

6．図面及び遺物の注記に当たっては以下の遺構略号を使用した。
竪穴住居址…SB　土坑…SK

7．土層の色調及び土性の記載に当たっては『新版標準土色帳』2005年度版の表示に基づいて記した。

8．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により下平博行が行った。

9．本文の執筆・編集及び遺構写真撮影は下平が、遺物については西大寺フォト杉本和樹氏が撮影した。

10．本書に関連した出土遺物及び図面写真類は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目　次

序
例言
目次
第Ⅰ章　経　過
　第１節　調査に至るまでの経過……1
　第２節　調査の経過……1
　第３節　調査組織……3
　第４節　調査位置・調査区の設定……3
　第５節　調査の概要……3
第Ⅱ章　遺跡の環境
　第１節　自然環境……5
　第２節　遺跡の基本層序……5
　第３節　歴史環境……7
第Ⅲ章　調査結果
　第１節　遺構・遺物……9
第Ⅳ章　総　括
　第１節　周辺の調査事例……21
　第２節　川路大名神原遺跡の遺跡景観……22
　第３節　結語……22

写真図版
報告書抄録

第Ⅰ章　経　　過

第１節　調査に至るまでの経過

平成18年５月11日付で長野県飯田市川路4176　塩沢宗三より、飯田市川路5236－10番地（挿図１）において個人住宅の建設に関する埋蔵文化財発掘の届出が提出された。計画地は川路大明神原遺跡の一画にあたり、三遠南信道路建設に先立ち発掘調査が行われ、縄文時代中期の集落が確認された個所に隣接する。このため遺構の存在が確実視されるため、事前に発掘調査を実施することとした。

第２節　調査の経過

平成18年６月２日より調査に着手した。対象地を重機により掘削し、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づく基準点設置を㈲エムツークリエーションに委託実施し、作業員による遺構検出を行った。検出遺構を順次掘り下げ、遺構実測・写真撮影を行い、７月１日に現地見学会を実施した。その後、補足調査を実施し、７月３日、埋め戻し作業を行って現地作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において、現地での記録類の整理作業を行った。

平成19年度は、出土遺物の整理作業・報告書作成作業を行うこととなった。飯田市考古資料館で出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業・遺物実測を行い、遺物写真撮影・遺構図版の作成・トレース作業・版組等を実施し、本報告書作成作業にあたった。

調査日誌

平成18年６月２日　重機による表土剥ぎ
６月５日　遺構検出作業　住居址・土坑検出
６月６日　遺構掘削開始　土坑掘り下げ
６月７日　住居址掘り下げ　土坑写真及び図面作成
６月８日　土坑精査中床面確認　住居址05へ変更
６月９日　雨天中止
６月12～14日　住居址02・03・05調査
６月15日　雨天中止
６月16～19日　住居址02・03調査
６月20日　住居址02写真撮影
６月21日　住居址02図面、土坑写真撮影、住居址05調査開始
６月22日～29日　住居址04・05調査
６月30日　全体写真・住居址04埋甕調査・図面作成
７月２日　現地見学会
７月３日　住居址床下調査
７月４日　撤収作業及び重機による埋め戻し

挿図１　遺跡位置

第３節　調査組織

（１）調査団

調査主体者　飯田市教育委員会　教育長　伊澤宏爾

調査担当者　下平博行（飯田市教育委員会生涯学習・スポーツ課）

調　査　員　馬場保之（～平成18年度）・山下誠一（平成19年度～）・澁谷恵美子・下平博行
坂井勇雄・羽生俊郎

作　業　員　伊藤和恵　伊東裕子　金井照子　小平まなみ　関島真由美　竹本常子
中村地香子　中島育子　中平けい子　中田　恵　林　伸好　樋本宣子
福沢育子　牧ノ内昭吉　松井明治　松本恭子　森藤美知子　森山律子
宮内真理子　吉川悦子

（２）指　導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

（３）事務局

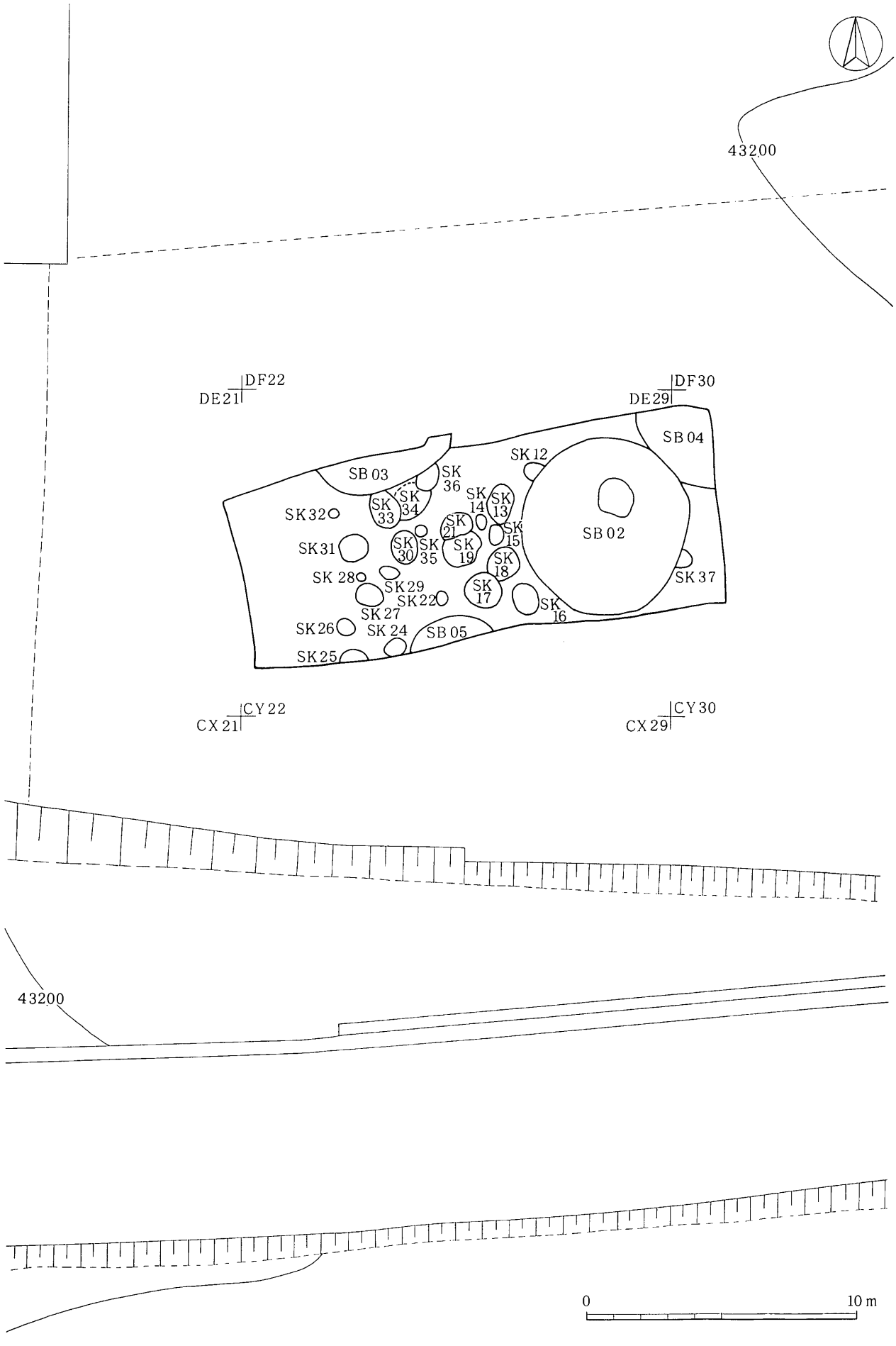
飯田市教育委員会生涯学習課（～平成18年度）・生涯学習スポーツ課（平成19年度～）
小林正春（生涯学習課長　～平成18年度）
宇井延行（生涯学習スポーツ課長　平成19年度～）
馬場保之（文化財保護係長　～平成18年度）
山下誠一（文化財保護係長　平成19年度～）
宮澤貴子・澁谷恵美子・下平博行・坂井勇雄・羽生俊郎（以上　文化財保護係）

第４節　調査位置・調査区の設定

今次調査は、飯田市川路5236－10番地であり、調査前は畑地として利用されていた。遺跡における発掘調査位置は、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図による区画、MC04　18－33に位置し、これに基づいたグリット設定を㈲エムツークリエーションに委託実施した。

第５節　調査の概要

住宅部分およそ126㎡を調査対象とした。遺構検出面は耕作土下のソフトローム面で、確認された遺構（挿図２）は縄文時代中期の住居址４軒・土坑24基で、遺物は縄文時代中期の土器・石器が主体となった。


43200
DF22
DE21
DF30
DE29
SB04
SK12
SB03
SK
36
SK
34
SK
33
SK
14
SK
13
SK32
SK
21
SK
15
SB02
SK31
SK
30
SK
35
SK
19
SK
18
SK 28
SK29
SK22
SK
17
SK37
SK27
SK
16
SK26
SK 24
SB05
SK25
CY22
CX21
CY30
CX29
43200
0
10 m

挿図２　遺構全体図

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然環境

飯田市は伊那山脈と木曽山脈に挟まれた伊那盆地（通称　伊那谷）の南端に位置し、盆地の中央には天竜川が南流する（挿図１）。

伊那谷の地形は、山脈の形成に関わる断層地塊運動によって成立した盆地や段丘とによって構成された段丘地形であり、さらに山塊からの扇状地や天竜川の支流群の浸食によって形成された田切地形と呼称される河岸段丘とが組み合わさり、より複雑な地形を生み出している。この段丘は、主に御嶽山の火山灰土の堆積を基準にし、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの５段階に編年されている（下伊那地質誌編集委員会　1978)。

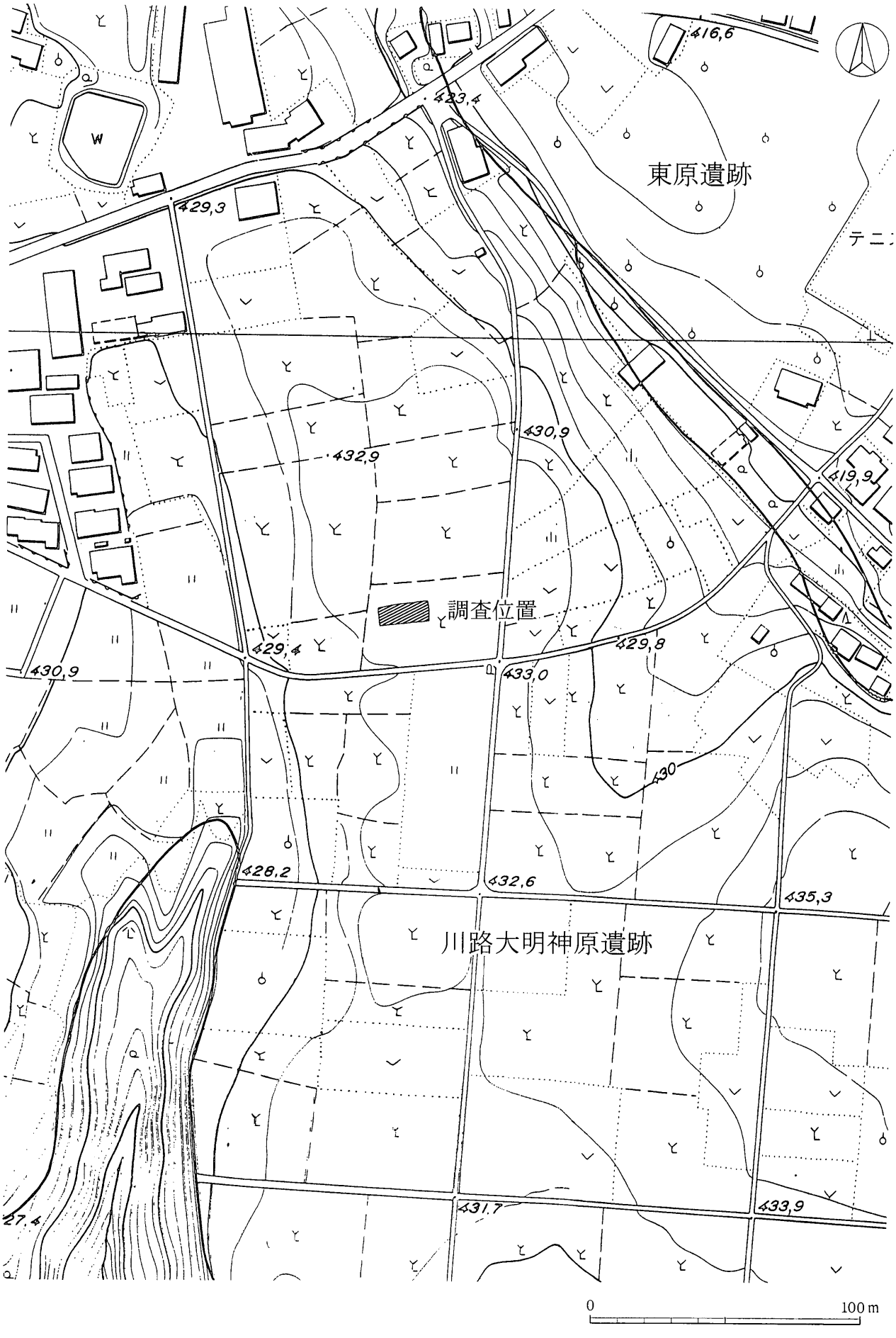
川路大明神原遺跡の所在する飯田市川路地区は、飯田市の南部にあたり、市街地からは南へおよそ８km に位置し、東側を天竜川、北側を久米川、南側を弟川によって挟まれた面積およそ6.16平方キロメートルの地域である。西と南は標高450～550mの低い丘陵に囲まれ、天竜峡の渓谷に阻まれて形成された天竜川の氾濫堆積による平坦面が大半を占めている。かつては県道上川路大畑線から天竜川にかけて緩やかに傾斜をしており、広大な桑園地帯をなしていた。しかし、現在は昭和36年の水害をはじめ幾たびか水害を受け、その地形を留めていない。

川路地区の地形は、天竜川の浸食及び活断層に起因する段丘により３段に大別される。さらに、その段丘は北から相沢川・留々女川・南沢川・ねぎや沢川・観音沢川・大畑沢川・初沢川といった天竜川支流の小河川により細かく分断されている。一方、天竜川氾濫原から僅かに高まった下段とされるところは、北から久保田・留々女・殿村・富岡・梶垣外・井戸下が立地する。中段は現在国道151号が通過している標高400m前後の狭い段丘面である。北から花御所・今洞・御射山原・防垣外・道上が立地し月の木・大畑へと続く。丘陵地ともいえる上段は中段面より30m前後の比高差をもって北から琴原・藤治ヶ峯・上平・弥宜屋平・初ノ免・川路大明神原・中原が立地する。

遺跡は天竜川右岸に位置し、調査個所周辺の標高はおよそ430m前後で、北側を大畑沢川に、南側を初沢川によって開析された台地上に立地する。台地ほぼ中央には南から抉入する小河川の痕跡が認められ、これによって台地が東西に分断されており、それぞれ南北に細長い小丘陵を呈している。今次調査地点は、東側の小丘陵の西斜面部に位置し、調査地点から東側は馬の背状の平端部となり東側斜面に続く、周辺は畑地・果樹園等に利用されている（挿図３）。

第２節　遺跡の基本層序

調査区北壁中央で基本層序の確認を行った。Ⅰ層は耕作土で層厚はおよそ30cm、Ⅱ層はソフトローム層で層厚はおよそ20cmを測り、上面が遺構検出面となる。Ⅲ層はハードローム層で、更に下層の天竜川堆積物に続くと推定される。



挿図３　調査位置及び周辺の遺跡

第３節　歴史環境

川路地区の地形は、天竜川に面する最低位段丘面と、桐林面に相当する標高400m以上の低位段丘面に大別される。特に最低位段丘面には前方後円墳の正清寺古墳をはじめ多数の古墳があり、市内でも有数の古墳集中地帯となっている。また、隣接する上川路地区には白鳳期の瓦が出土した開善寺・重要文化財の四仏四獣鏡が出土した御猿堂古墳など古墳時代から奈良時代にかけての主要な遺跡が集中する地帯である。こうした遺跡を中心に時代毎の概観を行い、川路地区の歴史的変遷を追ってみたい。

（１）縄文時代

川路地区に人々が生活した痕跡を残したのは縄文時代に始まる。今次調査区南側の月の木遺跡からは、縄文時代前期前半の住居址が確認され、周辺に当該期の大集落が存在する可能性がある。また、久米川南岸の今洞遺跡からは縄文時代前期後半の住居址が確認されている。両遺跡とも、調査面積・遺跡の状態から集落の規模などは確認されていない。

縄文時代中期では低位段丘面上が中心になる。今次調査個所のある川路大名神原遺跡は川路地区の南端に位置し、周辺の調査状況から中期初頭から後葉にかけての30軒を越す集落が確認されており、拠点的な大規模集落が形成されていたと考えられる。同一段丘面の初ノ免遺跡・藤原塚遺跡でも縄文時代中期の遺物が表面採集されている。

縄文時代後期・晩期では生活の舞台としての川路は不明瞭となり、遺跡数も少なく、断片的な資料のみである。今洞遺跡からは浮線網状文の施された氷Ｉ式土器が出土しているが、当該期の遺構等は確認されていない。全国的に縄文時代後・晩期は水場に近い低地に進出し、河川を積極的に利用していることから、不明瞭な最低位段丘面に同時期の遺跡が存在する可能性が高い。

（２）弥生時代

段丘上の東原遺跡で住居址が１軒確認されていたが集落の存在も不明瞭であった。しかし、今次調査区からおよそ１km北側の井戸下遺跡から、弥生時代中期の今阿島式期の住居址・弥生時代後期の住居址が確認され、周辺の最低位段丘面上に弥生時代中期から後期の集落が多数存在する可能性を示している。

（３）古墳時代

古墳時代にはいると地区内に多くの古墳が築造される。正清寺古墳（前方後円墳）をはじめ地区内には48基の古墳が確認されている。古墳は花御所地籍・正清寺古墳周辺・月の木地籍に集中しており、古墳群を形成している。その立地は正清寺古墳周辺の古墳を除き、低位段丘面上に位置している。古墳の多くは破壊され、地区内に多くの出土品が伝えられている。川路最大の古墳である正清寺古墳は、全長約60mの前方後円墳で、後円部に横穴式石室を持つと伝えられ、五鈴鏡・玉類・馬具・武具類が出土している。平成11年度の治水対策事業に伴う発掘調査では、二重周溝を有し、周溝部分が一度修復さ

れていることが判明している。周溝内からは多数の埴輪・須恵器・土師器類が出土し、５世紀末～６世紀と推定されている。また、花御所１号古墳からは金銅装の馬具類・玉類等の豊富な出土品が知られている。また下辻古墳は全長8.8mの横穴式石室を有し、馬具類・玉類等の出土品がある。今次調査区北西側の最低位段丘面にあった殿村１号古墳からは四獣鏡・素文鏡が出土している。

一方、古墳時代の集落は、治水対策事業に伴う発掘調査で、井戸下遺跡・留々女遺跡・辻前遺跡・久保田遺跡で大規模な集落が確認されている。このうち井戸下遺跡（飯田市教育委員会　2001）では古墳時代中期を中心とする30軒の住居址が確認されており、天竜川を挟んで東側に位置する細新遺跡（飯田市教育委員会　1998）と集落の消長が同様の傾向を示していることが指摘されている。今後、他遺跡の報告が行われる中で、天竜川両岸における古墳時代の様相が判明すると思われる。

（４）奈良・平安時代

奈良・平安時代の川路地区は断片的な資料のみであったが、竜丘上川路には奈良時代と推定される布目瓦が出土した開善寺境内遺跡があり、周辺に寺院の存在を窺わせる。川路地区では、治水対策事業で調査された留々女・辻前遺跡から平安時代の住居址が確認されている。井戸下遺跡では奈良時代～平安時代と推定される水田址・溝址が確認され、低位段丘面一帯に集落と水田が営まれていたと推定される。

（５）中　世

川路地区が文献上に現れるのは貞和２年（1346）の三浦和田文書中の７月19日室町幕府下知状案である。これは当時、伊賀良庄地頭であった江間氏の族人江間尼浄元が庄内の中村・河路の２郷を開禅寺（開善寺）に寄進し、それを新給人が了承した旨の記載がある。また、織田氏の信濃攻略により開善寺から持ち出された梵鐘（現高遠町桂泉院に存在）には文和４年（1355）の銘があり、その文中に伊賀良庄上河路郷の記載がある。こうした史料から室町時代には川路地区が上河路郷・下河路郷にわかれ、伊賀良庄に含まれていたと考えられる。また、康永３年（1344）小笠原貞宗譲状の中に伊賀良庄が記載されており、室町時代には小笠原氏が川路地区を領有していたことがわかる。その後、武田氏の伊那侵攻後、天正７年（1579）の上諏訪造営帳に伊賀良庄内の役銭納入状況が記されており、その中に上河路郷・下河路郷等の記載が見られる。このように川路地区は伊賀良庄の一郷として文献に記されている。河路郷の詳細は不明であるが、井戸下遺跡からは14世紀代から15世紀代にかけての屋敷跡が確認されており、留々女遺跡でも同時期の掘立柱建物址群が検出されている。こうした成果から河路郷の集落の実態が判明すると思われる。集落の他に今次調査地点北西側の城山には、尾根を利用した山城が確認されている。伝承等も無く、詳細は不明な点が多いが、戦国期の山城と推定されている。

第Ⅲ章　調査結果

第１節　遺構・遺物

（１）縄文時代の住居址と遺物

①住居址02（SB02）

調査区東側DD28を中心に確認された縄文時代中期後葉の住居址である（挿図５）。住居址04と重複するが、重複個所が僅かなため、遺構での新旧関係は掴めなかったが、出土遺物の対比では、住居址04が新しいと考えられる。長径6.21m・短径6.16mのほぼ円形を呈し、主軸はN26°Eを示す。覆土は３層に分層され、遺物は１層全体及び２層北側を中心に出土している。壁は急な立ち上がりで、検出面からの深さはおよそ30cm程度である。周溝は、壁直下及び住居址内部にそれぞれ１条確認されることから住居址の拡幅が行われたと考えられる。壁直下の周溝は幅10～15cm、深さ10cm程度で、南側で一部途切れる部分がある。住居址内部の周溝も同様な規模で、北東側部分で一部壁直下の周溝と重複する。周溝の状況から南西側に1.2m程度の拡幅が考えられる。柱穴は16本確認され、拡張前の住居址の主柱穴はＰ１～Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６の５本で、拡張後がＰ４・Ｐ８・Ｐ10の３本と考えられる。また、Ｐ16は住居址内部の土坑の可能性がある。床面は硬く叩き締められており、拡張前の柱穴も貼床されていた。

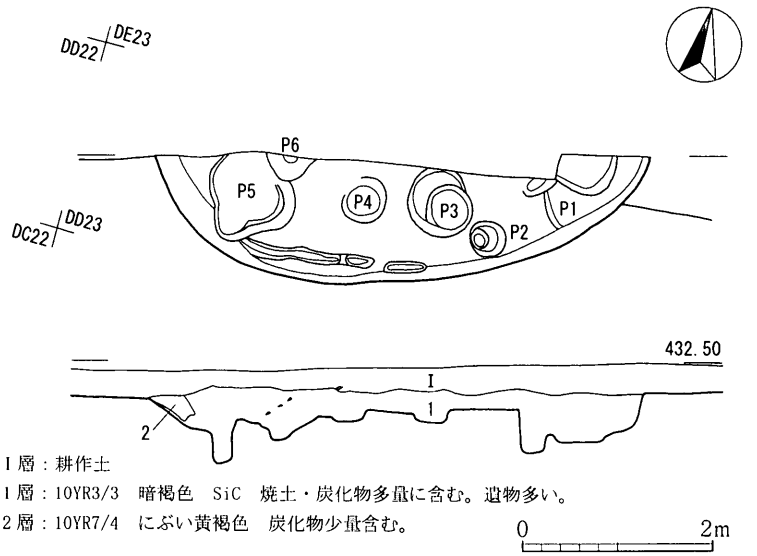
炉址は中央やや北壁寄りに作られた石囲炉で、一辺1.2m程度の方形を呈し、深さはおよそ30cmである。炉縁石はすべて抜かれているが、いわゆる掘炬燵状の炉と考えられる。

遺物は住居址中央に堆積した覆土１層を中心に出土しているが、破片が多い（挿図10）。復元された個体は住居址北西壁付近から出土した深鉢（挿図13－１）がある。東海地方の中富式に近似する土器で、地文には条線が施されている。この他に同様な深鉢（３）、鍔付土器（２）がある。

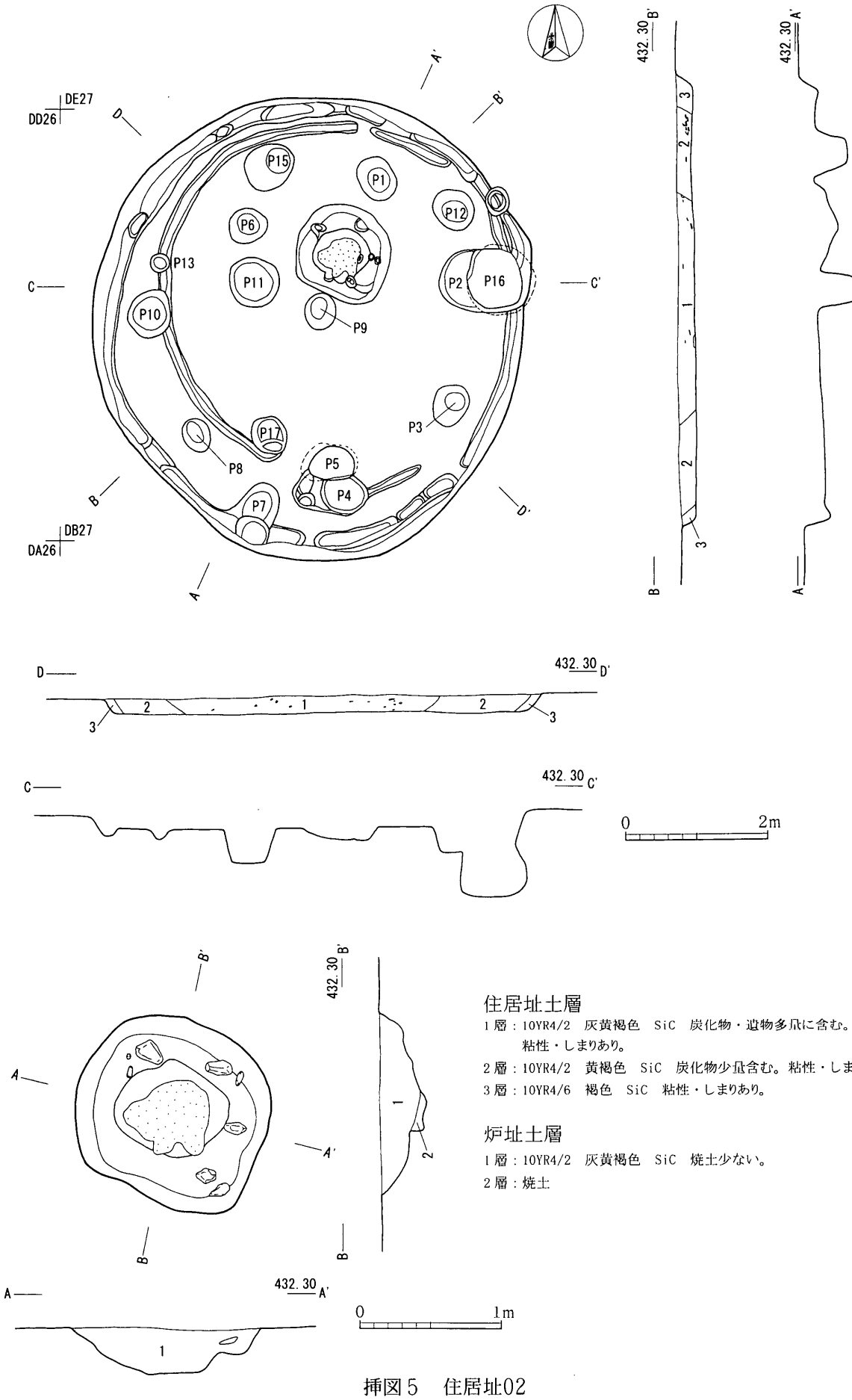
石器は打製石器・横刃形石器・石錘・叩石が出土している（挿図14）。また覆土中から旧石器時代と考えられる凝灰質頁岩製の彫器（挿図14－１）も出土している。

②住居址03

調査区北端のDE24を中心に確認された。縄文時代中期後葉の住居址である（挿図４）。遺構の大半が調査区外へ広がり、全体の１／３程度を調査した。全体の規模は不明で平面形は円形と推定される。遺構覆土は２層に分層され、覆土１層は炭化物や焼土、土器を含むため、焼失家屋と考えられる。壁は急な立ち上がりで検出面からの深さはおよそ20cmである。周溝は、南壁に一部確認さ



挿図４　住居址03



住居址土層

1層：10YR4/2　灰黄褐色　SiC　炭化物・遺物多量に含む。
　　粘性・しまりあり。

2層：10YR4/2　黄褐色　SiC　炭化物少量含む。粘性・しまりあり。

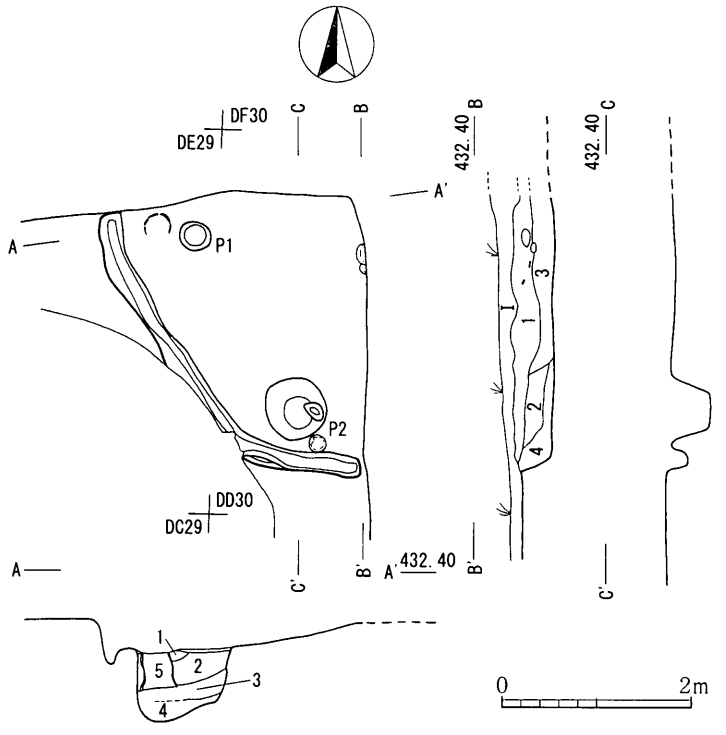
3層：10YR4/6　褐色　SiC　粘性・しまりあり。

炉址土層

1層：10YR4/2　灰黄褐色　SiC　焼土少ない。

2層：焼土

挿図5　住居址02



住居址土層

Ⅰ層：耕作土

1層：10YR4/2　灰黄褐色
　土器・石器多く含む。炭化物含む。

2層：10YR6/4　にぶい黄褐色
　径1cmの黄色ブロック・炭化物・遺物多く含む。

3層：10YR5/2　灰黄褐色　焼土少量含む。

4層：10YR6/3　にぶい黄橙色　炭化物含む。

埋甕堀りかた土層

1層：10YR6/1　褐灰色　炭化物少量含む。

2層：10YR7/4　にぶい黄褐色　炭化物含む。

3層：10YR6/3　にぶい黄褐色　炭化物含む。

4層：10YR5/2　灰黄褐色　炭化物含む。

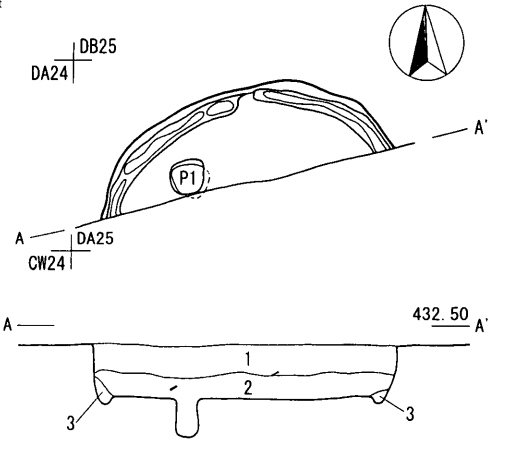
5層：10YR5/1　土器内部の土。炭化物含む。

挿図6　住居址04

れているが全周しない。柱穴は6本確認され、P3～5が主柱穴と考えられる。床は貼り床で、硬く叩き締められている。

遺物は覆土1層を中心に確認され、破片が多い。加曽利E式の影響を受けた土器（挿図12－1）、中富式に近似する土器（2）などが出土している。

石器は打製石器・横刃形石器等が出土している。



1層：耕作土

2層：10YR5/1　褐灰色　SiC
　炭化物少量含む。粘性・しまりあり。

3層：10YR5/3　にぶい黄褐色　SiC　ロームブロック多く含む。

挿図7　住居址05

③住居址04

調査区北東隅のDE30を中心に確認された。全体の3／4が調査区外へ延びる。縄文時代中期後半の住居址で、南西側で住居址02と重複し、これより新しい（挿図6）。遺構覆土は4層に分層され、1・2層に遺物や炭化物が集中する。確認された部分での壁は急な立ち上がりで、壁直下に幅20cm、深さ20cm程度の周溝が確認された。主柱穴は2本確認されている。床面は硬く叩き締められており、西壁付近に倒位の埋甕が確認された。埋甕は、直径1m・深さ70cm程度の掘りかた内に埋設され、土器内部からは炭化物が少量確認された。

遺物は住居址中央部を中心に出土し、破片が多い（挿図11）。このうち埋甕に使用された深鉢（挿図13－6）は、口径40.5cm・残存部器高43.4cmを測る。キャリパー形の無文の口縁部となり、頸部に取手の剥離が3箇所確認される。各々の剥離個所では、取手の接合部分が4点あるため、X字状を呈すると考えられる。胴部の文様は、隆帯貼付後に隆帯間へ沈線を充填している。曽利式土器に影響を受けた土器と考えられる。また挿図13－4は、東海地方の神明式土器に類似する。5はタル形の深鉢で、胴部には隆帯による渦巻状の文様を貼付し、渦巻き内に沈線を充填する唐草文系土器である。

この他に、口縁部の沈線による楕円区画内に条線を充填するもの（挿図11－1）や、加曽利E式に影

響を受けた土器（2）、胴部に綾杉状の沈線が施されるもの（6）、縄文が施されるもの（9）などが出土している。また土器片を利用した土製円盤（挿図12－17）も出土している。

石器は打製石器・横刃形石器等（挿図14－17～19）が出土している。

④住居址05

調査区南端中央付近DA25を中心に確認された縄文時代中期後葉の住居址である（挿図7）。住居址の大半は調査区外へ広がる。覆土は2層に分層され、1層中より遺物は出土している。壁は急な立ち上がりで、検出面からの深さはおよそ25cmである。壁直下に幅20cm、深さ10cm程度の周溝が確認された。床は他の住居址に比し軟弱で、部分的に硬く叩き締められた部分も確認された。主柱穴は1本確認されている。

遺物は覆土を中心に出土しているが、量は少なく破片のみである（挿図12－12）。

（2）縄文時代の土坑と遺物

今次調査区からは縄文時代中期後半と考えられる土坑が24基検出されている。大半の土坑は少量の土器片が出土したのみである。このうち特徴的な土坑について記載し、その他の土坑に関しては土坑観察表を参考にされたい（挿図8・9）。

①土坑13

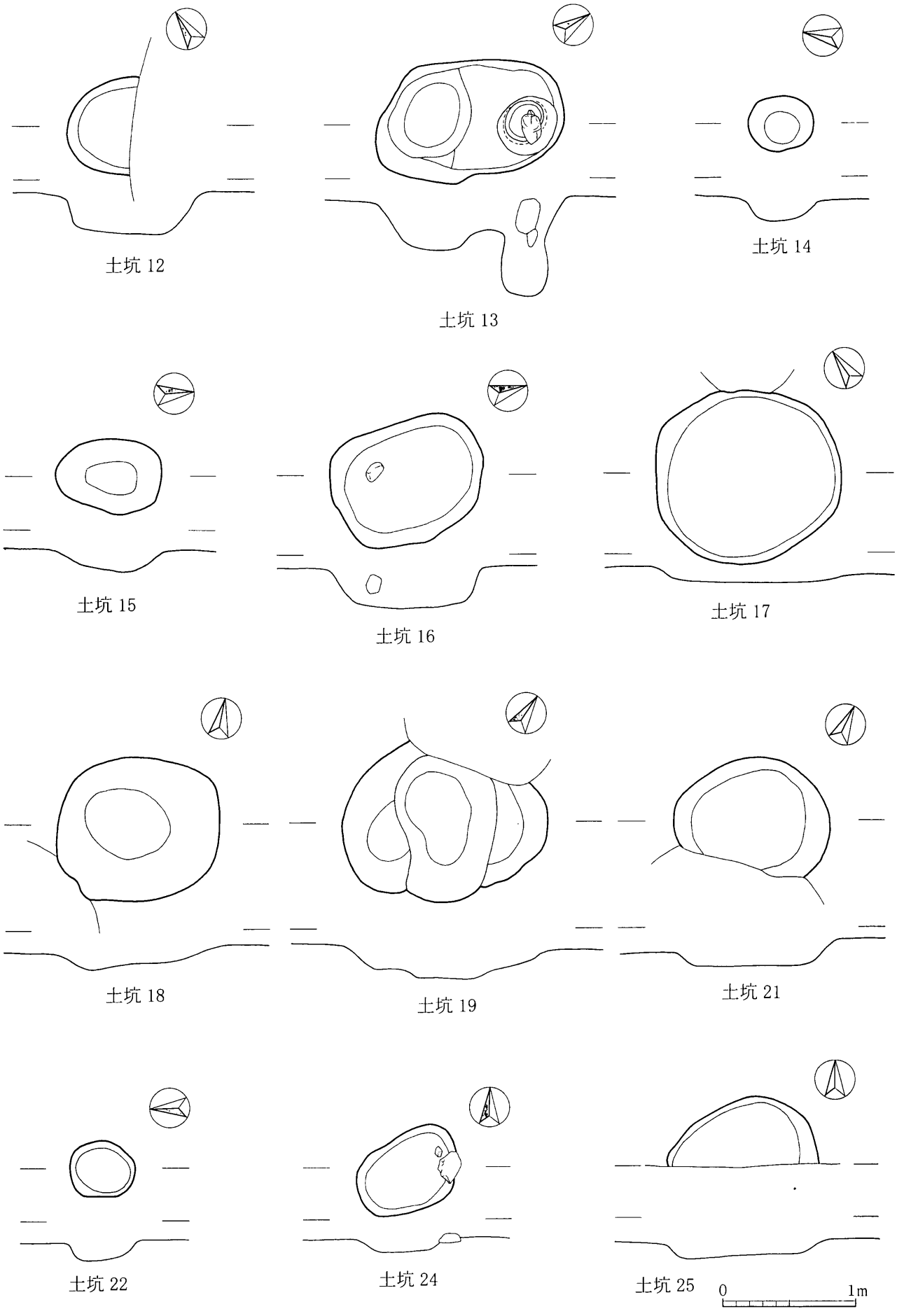
DC26から確認された縄文時代中期後半と考えられる土坑である。長径140×短径84cmの楕円形を呈し、土坑底面の北端と南端に掘り込みが見られる。このうち北側の掘り込みは、直径30cm・深さ50cmで、土坑上面から自然石を利用した石棒が差し込まれていた。

②土坑27

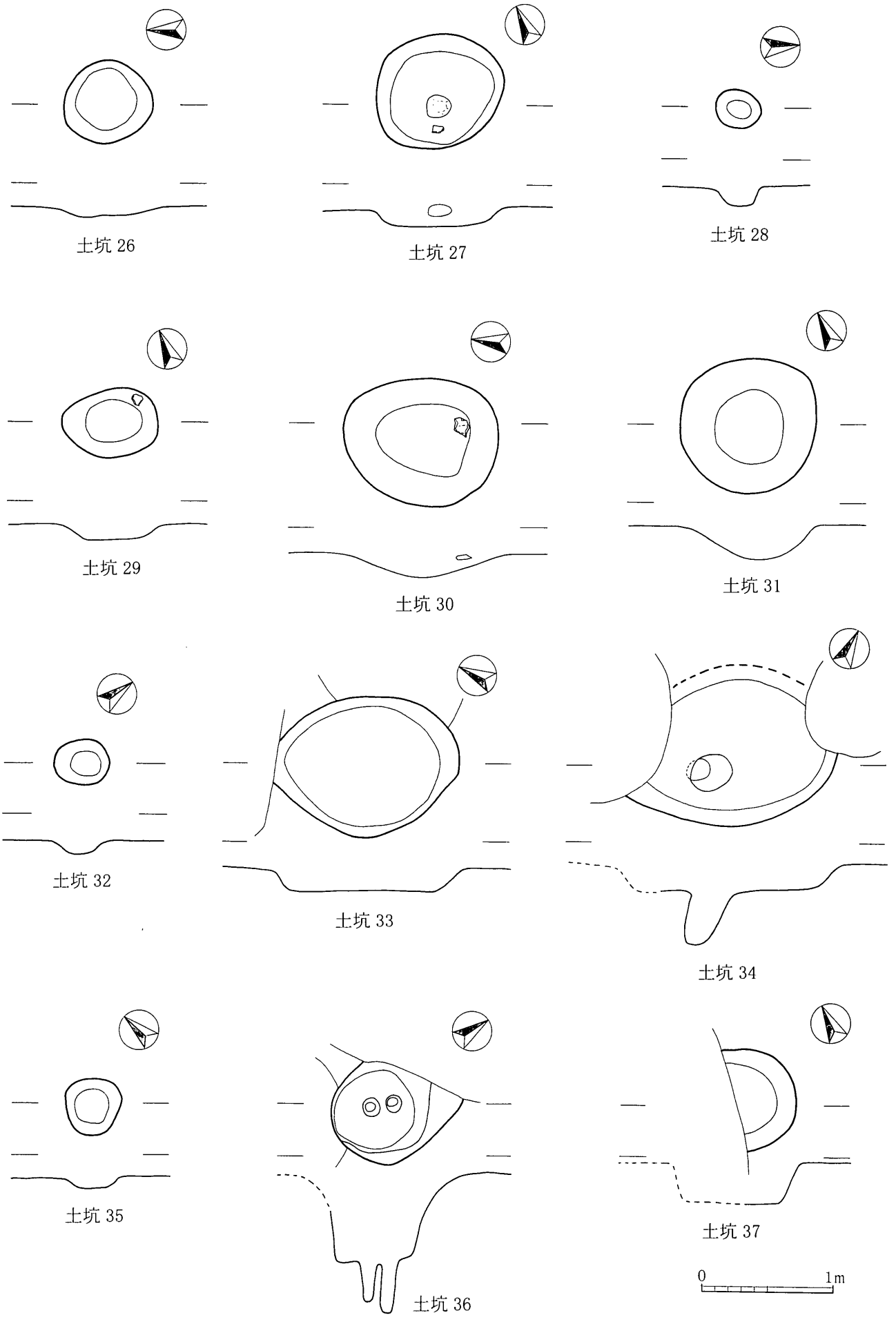
DE24から確認された縄文時代中期後半と考えられる土坑である。長径96×短径86cmの楕円形を呈し、壁は緩やかな立ち上がりを見せる。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。遺構覆土は単層であるが、上面に円形の礫が見られた。覆土中に礫や石器等が埋納される同様な事例に土坑24・30があり、土坑墓としての機能が推定される。

土坑観察表

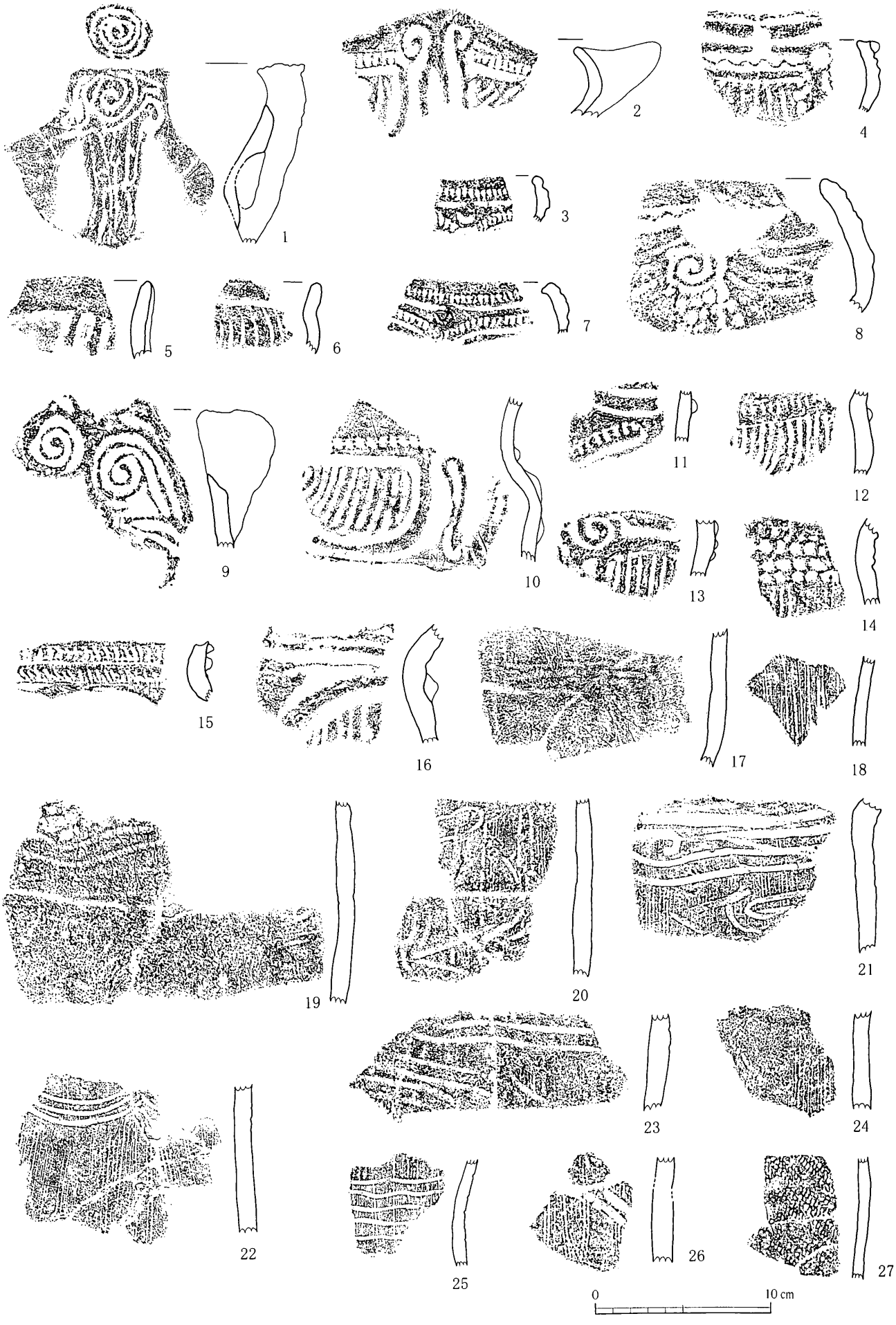
土 坑 No.	挿 図 No.	検出位置	規模（長×短×深さ）cm	形　態	時　　代
土坑12	挿図8	DD27	(80) × 72 × 25	楕円形	縄文中期後半
土坑13	挿図8	DC26	140 × 84 × 73	楕円形	縄文中期後半
土坑14	挿図8	DC26	50 × 42 × 16	円　形	縄文中期後半
土坑15	挿図8	DC26	76 × 34 × 16	楕円形	縄文中期後半
土坑16	挿図8	DB27	118 × 92 × 28	楕円形	縄文中期後半
土坑17	挿図8	DB26	140 × 130 × 21	円　形	縄文中期後半
土坑18	挿図8	DB25	120 × 108 × 16	楕円形	縄文中期後半
土坑19	挿図8	DC26	132 × (126) × 26	不整形	縄文中期後半
土坑21	挿図8	DC26	120 × (82) × 18	楕円形	縄文中期後半
土坑22	挿図8	CY25	50 × 38 × 15	円　形	縄文中期後半
土坑24	挿図8	DA24	82 × 58 × 8	楕円形	縄文中期後半
土坑25	挿図8	DA24	116 × (50) × 22	不整形	縄文中期後半
土坑26	挿図9	DA23	70 × 62 × 8	円　形	縄文中期後半
土坑27	挿図9	DE24	96 × 86 × 14	楕円形	縄文中期後半
土坑28	挿図9	DB24	36 × 28 × 15	円　形	縄文中期後半
土坑29	挿図9	DB24	74 × 56 × 12	楕円形	縄文中期後半
土坑30	挿図9	DB25	118 × 96 × 15	楕円形	縄文中期後半
土坑31	挿図9	DB24	104 × 102 × 22	円　形	縄文中期後半
土坑32	挿図9	DC23	40 × 35 × 11	円　形	縄文中期後半
土坑33	挿図9	DC24	140 × 107 × 19	楕円形	縄文中期後半
土坑34	挿図9	DD25	(124) × (112) × 62	不整形	縄文中期後半
土坑35	挿図9	DC25	42 × 42 × 10	円　形	縄文中期後半
土坑36	挿図9	DD25	100 × (76) × 106	不整形	縄文中期後半
土坑37	挿図9	DB30	(60) × 80 × 31	不整形	縄文中期後半



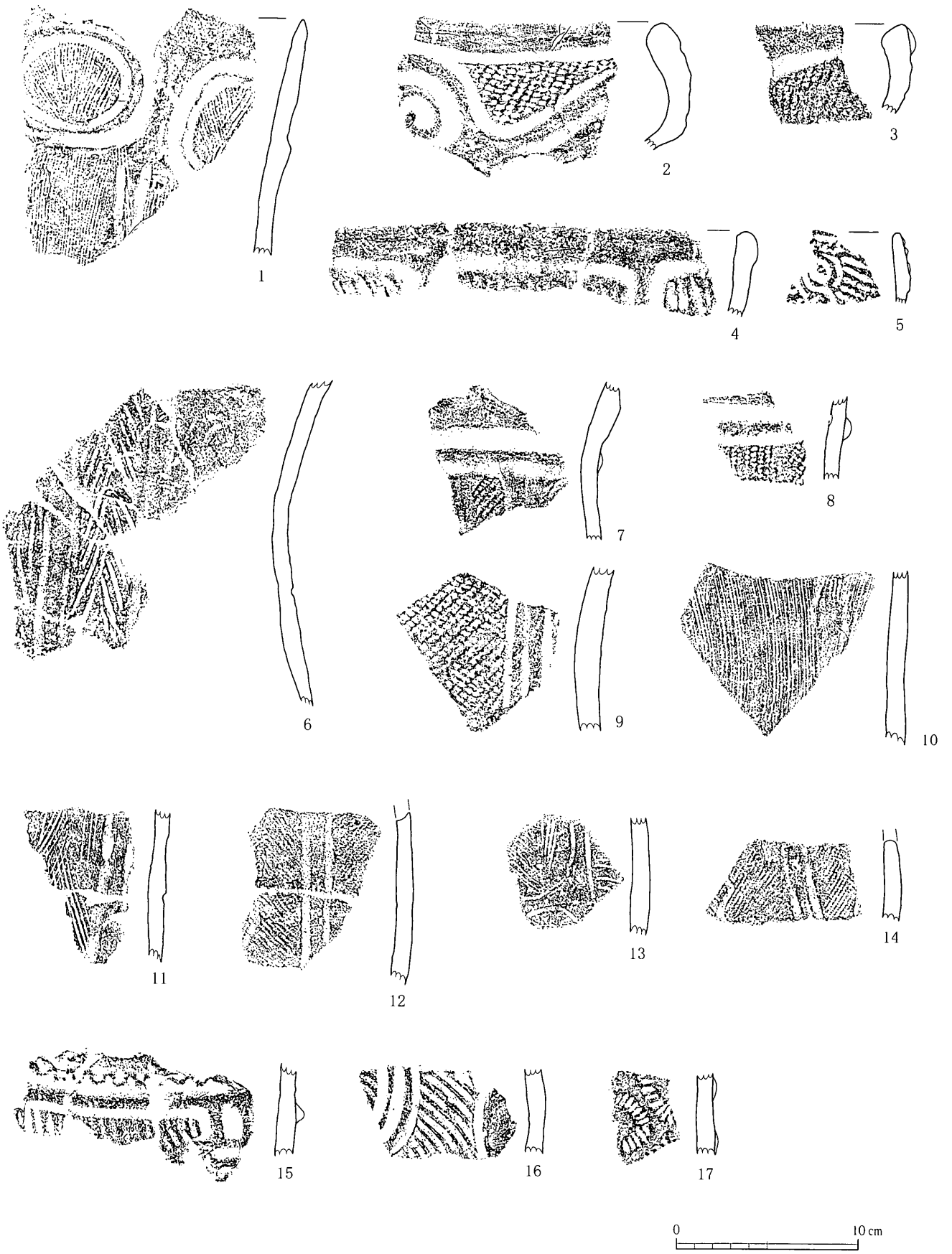
挿図８　土坑（１）水糸高はすべて432.30m



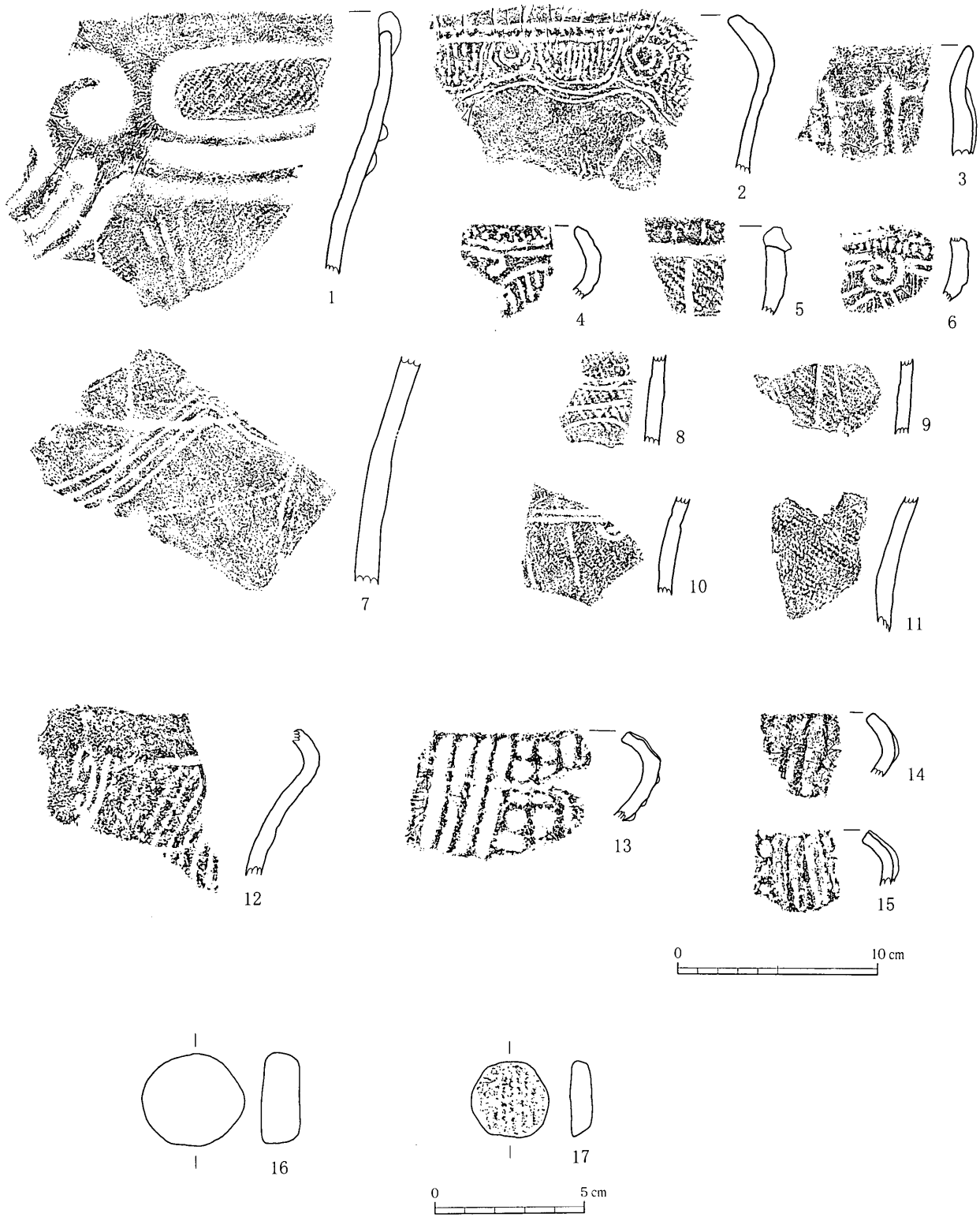
挿図９　土坑（２）水糸高はすべて432.30m



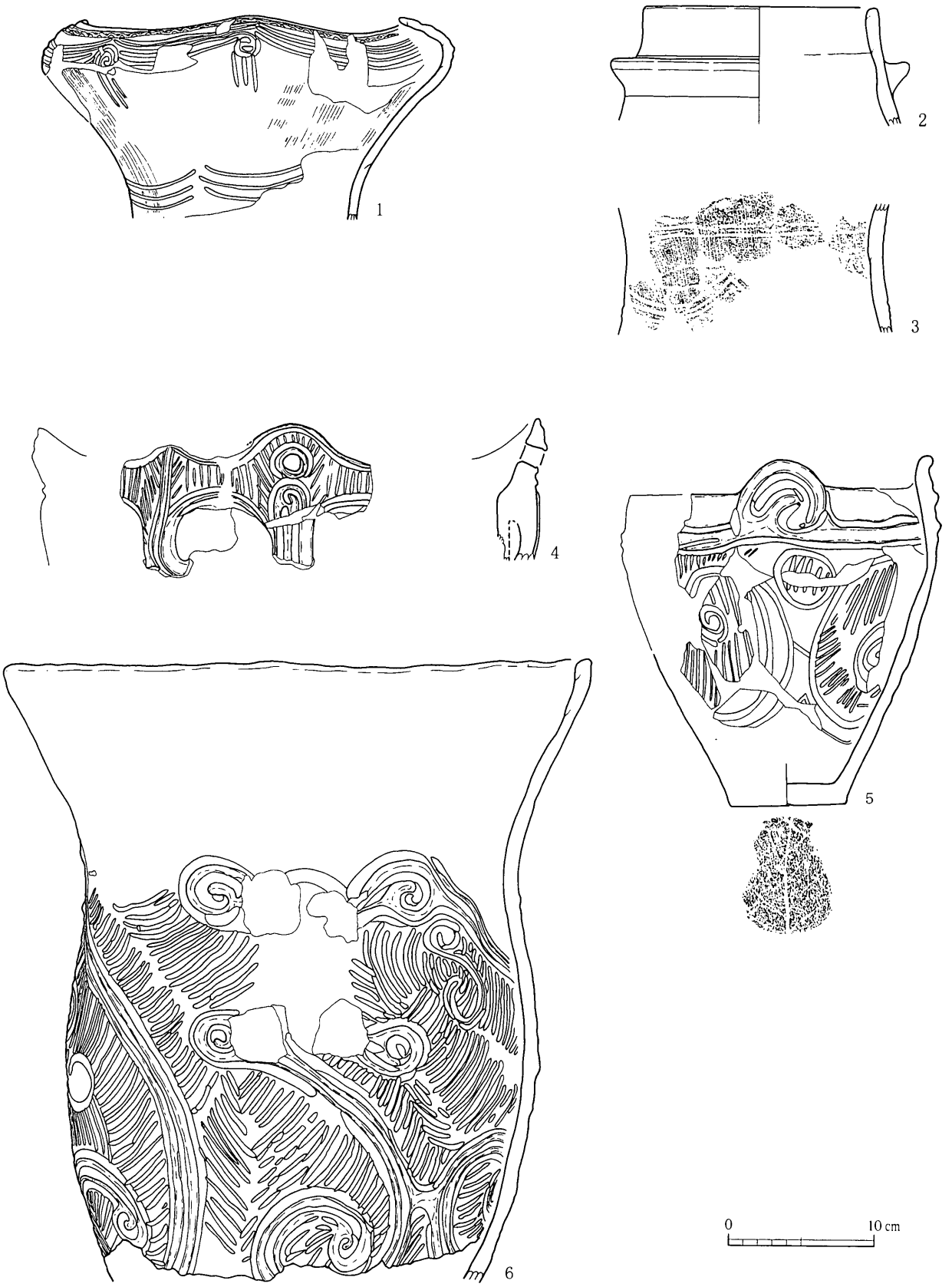
挿図10　住居址02　土器



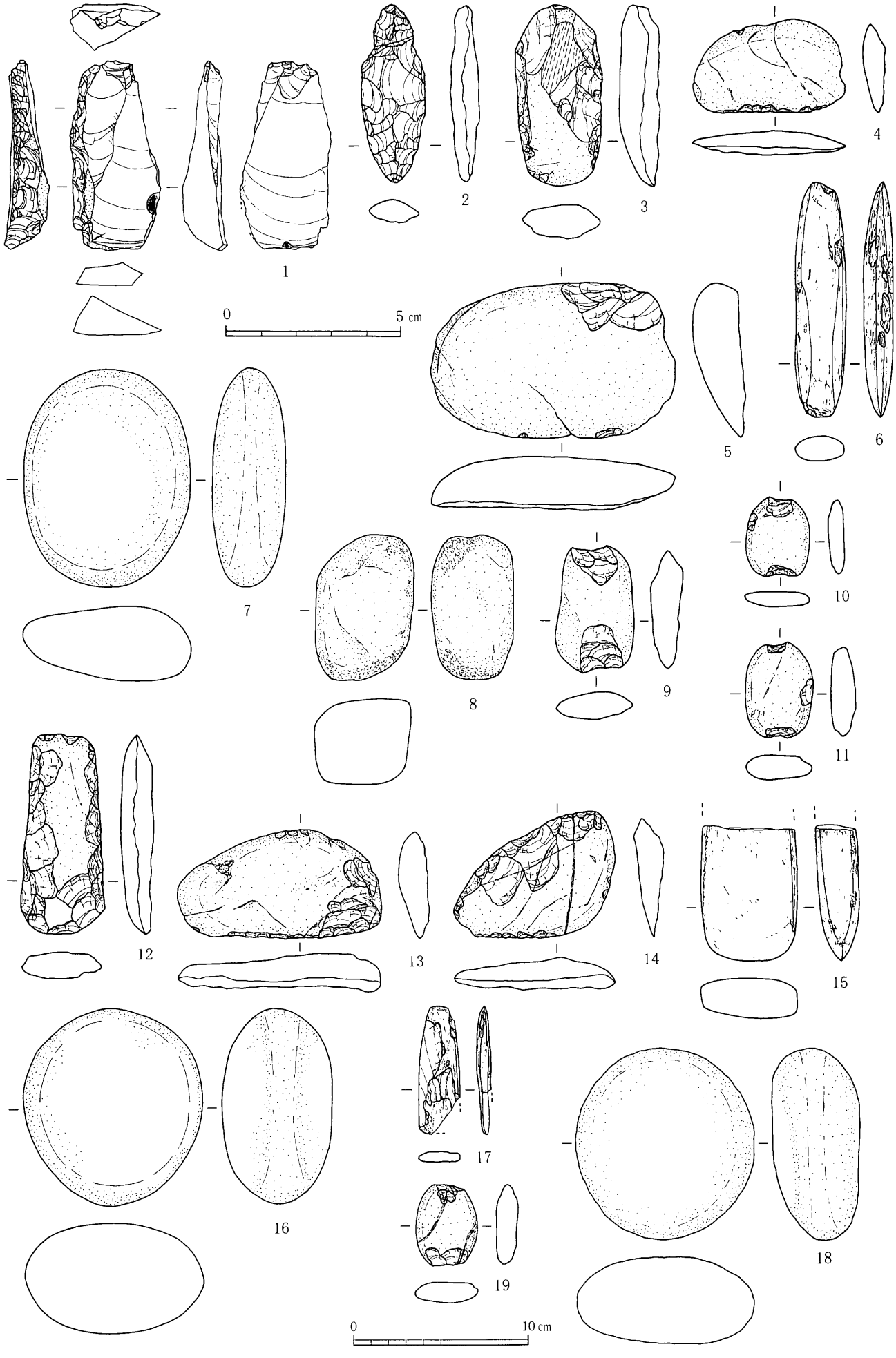
挿図11　住居址04　土器



挿図12　住居址・土坑土器・土製品（1～11：住居址03　12：住居址05　13～15：土址34　16：土坑20　17：住居址04）



挿図13　住居址土器（1～3：住居址02　4～6：住居址04）



挿図14　石器（1～11：住居址02　12～16：住居址04　17～19：住居址05）

第Ⅳ章　総　　括

今次調査は、個人住宅建設予定地というごく狭い範囲に限られたもので、遺跡全体からするとそのごく一部に試掘孔をあけた程度のものといえる。その調査成果は本文中に記したとおりであり、周辺の調査事例とあわせ、川路大明神原遺跡の遺跡景観が判明しつつあると言える。このため、三遠南信道路及び周辺の試掘・確認調査等の成果を記し、川路大名神原遺跡の遺跡景観についてまとめ、今次調査の総括としたい。

第１節　周辺の調査事例

川路大名神原遺跡では、今次調査区南側を中心に、三遠南信道路建設に先立つ調査が実施されており、多数の遺構が確認されている。また調査区北側一体では、県道新設・鉄塔建設・宅地造成等に先立つ調査が数次にわたり実施されている。これらを以下にまとめる。

①三遠南信道自動車道建設に先立つ調査

今次調査区南側一帯、川路大名神原遺跡のほぼ半分に及ぶ個所で、三遠南信自動車道建設に先立つ調査が実施されている。調査は財団法人長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センターによって平成11年度～平成17年度の７ヵ年にわたって実施され、縄文時代中期を中心に、弥生時代後期までの住居址50軒以上、落とし穴をはじめとする土坑1000基以上が確認されている。現在報告書は作成中であるが、概要報告（長野県埋蔵文化財センター2005）によると、縄文時代中期集落の展開は、中期初頭・中葉段階では１～２軒程度の小単位の散在形態であったものが、後葉になると、遺跡東部の台地西縁部北半での集住化が想定されている。また台地中央部から天竜川に沿った東側は恒常的な居住域ではなく、落とし穴が分布するため、狩猟域としての利用形態が推定されている。

②川路5501－１番地（宅地造成に先立つ調査）

今次調査区北東側近接地である川路5501－１番地周辺で、平成17年度に宅地造成に先立ち実施した調査である。調査地点は、今次調査区から続く台地の東側縁辺部にあたり、西側に向かって緩やかな傾斜が認められた。遺構は、縁辺部を中心に縄文時代中期後葉の住居址10軒・土坑等多数が確認されている。しかし、斜面部から西側の谷状地形底面にかけて遺構・遺物は確認されず、一部に湧水も確認されている。遺跡は開発側との協議により、盛土造成を行い遺構を保護することとなった。

③川路5522－１・5537番地（県道敷設に先立つ調査）

今次調査区からおよそ300m程度北側の川路5537番地、5522－１番地で平成17年度に実施した調査である。5522－１番地では地表下1.3m付近で、グライ化した土壌が確認されたため、今次調査区西側に見られる谷状地形の一部と判断された。遺構・遺物は確認されていない。

5537番地は、この谷状地形の縁辺部に当たると考えられたが、ローム層の堆積は見られず、遺構・遺物は確認されなかった。

④川路5244番地（通信用鉄塔建設に先立つ調査）

今次調査区からおよそ100m程度東側の、台地縁辺部にあたる部分である。調査では、縄文時代中期の土坑11基、弥生時代後期の住居址１軒が確認されている。また東側隣接地での立会い調査では、遺構は確認されていない。

第２節　川路大名神原遺跡の遺跡景観

川路大明神原遺跡は、その名の示すとおり、広大な平地全体が遺跡範囲として捉えられている。しかし、詳細に微地形を観察すると、段丘中央部に南北方向の谷があり、谷の東側は段丘崖に沿った南北方向の細長い小丘陵が形成されている。そして小丘陵の南端には南西から北東方向の小さな谷が抉入する。こうした小河川の抉入により、天竜川及び初沢川に面した段丘端部に至るまで、畝状の微高地や台地状の高まりが大きく分けて３ヶ所確認できる。このような複雑な地形の成因は、天竜川の開析によると推定され、今次調査を含め他所でも、ローム層の下層にシルト質土壌が堆積している。一方、周辺の調査成果をこうした地形上にあてはめると、縄文時代中期における集落は、中央部の谷を挟んで東側の小丘陵を中心に展開することが明らかである。この集落は、細長い小丘陵上の平坦面から西側傾斜部にかけて帯状に展開し、東西の斜面部には土坑群が存在する。そして天龍側に面した台地上には落とし穴等が配置された狩場としての利用が推定される。また中央に見られる南北方向の谷は集落の水場として推定される。こうしたことから、縄文時代中期後葉の遺跡景観として、西側から、水場としての谷→小丘陵上の集落→天竜川に面した南東側台地上の狩場→天竜川といった景観が広がっていたと推定される。

一方、弥生時代後期の住居址は、三遠南信道路建設に先立つ調査でも確認されており、東側の一段低い段丘面に所在する東原遺跡でも住居址が確認されている。このため階段状に連なる段丘全体に弥生時代後期の住居址が散在する景観を想定できる。こうした集落展開は、高松原遺跡（飯田市教委　2000）、はりつけ原遺跡（飯田市教委　1998）と同様な傾向で、段丘上の弥生時代後期集落に特徴的といえる。

第３節　結　語

今次調査の結果は以上のとおりで、周辺の調査と合わせ、川路大明神原遺跡の遺跡景観が復元できたことは大きな成果といえる。しかしながら、三遠南信道路の開通や、県道バイパスの整備によって、周辺の開発が急激に進むことが予想される。このため、今まで以上の文化財保護の本旨に沿った、たゆまない努力こそが肝要となる。

なお、発掘調査及び整理作業にあたり、施主である塩沢宗三氏や御家族の皆様、地元川路地区の皆様や調査に携わった皆様にあつく御礼申し上げます。

参考文献

長野県埋蔵文化財センター　1999　『長野県埋蔵文化財センター年報16』
長野県埋蔵文化財センター　2005　『長野県埋蔵文化財センター年報22』

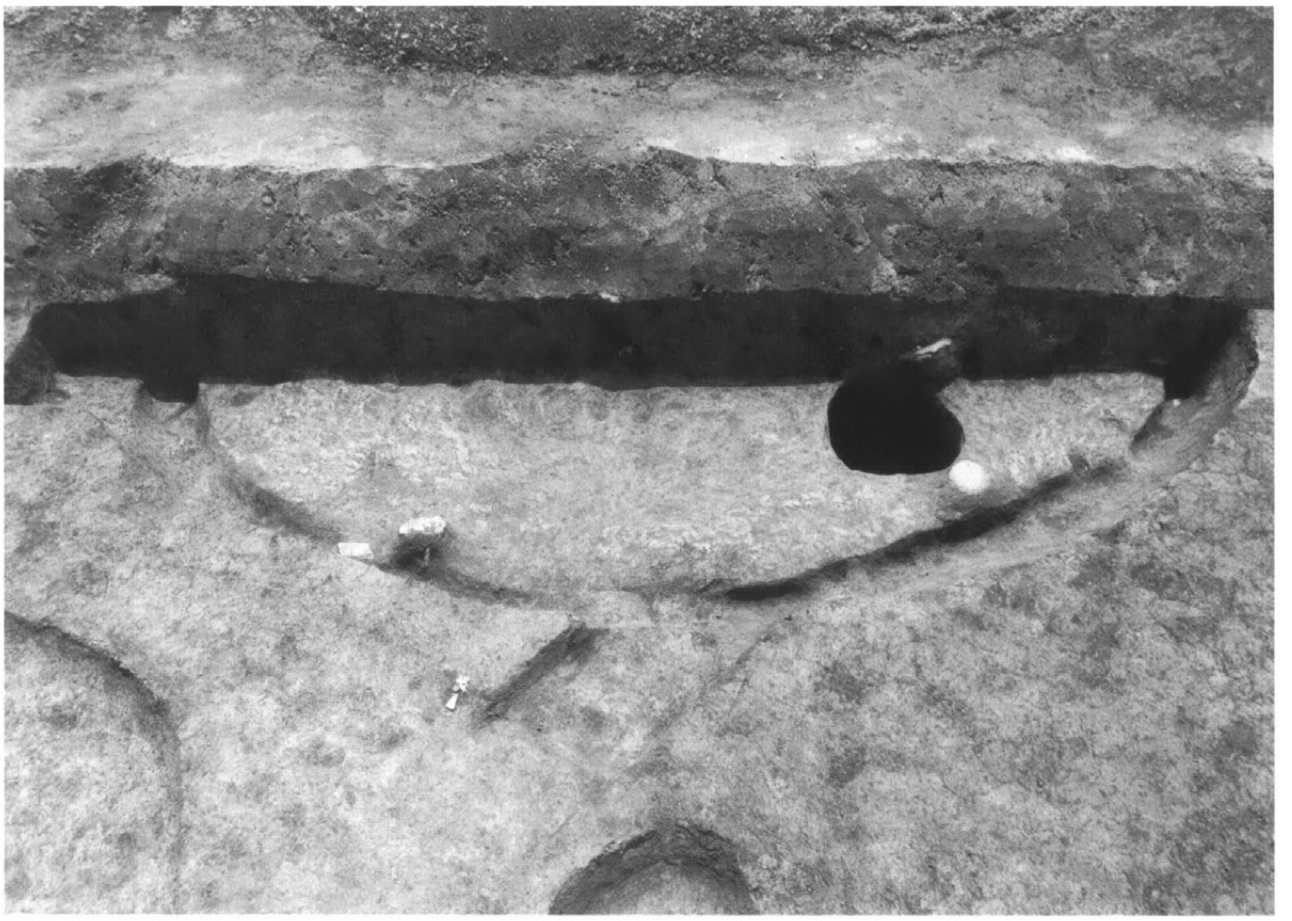
調査区全景

住居址02

図版 2

住居址03

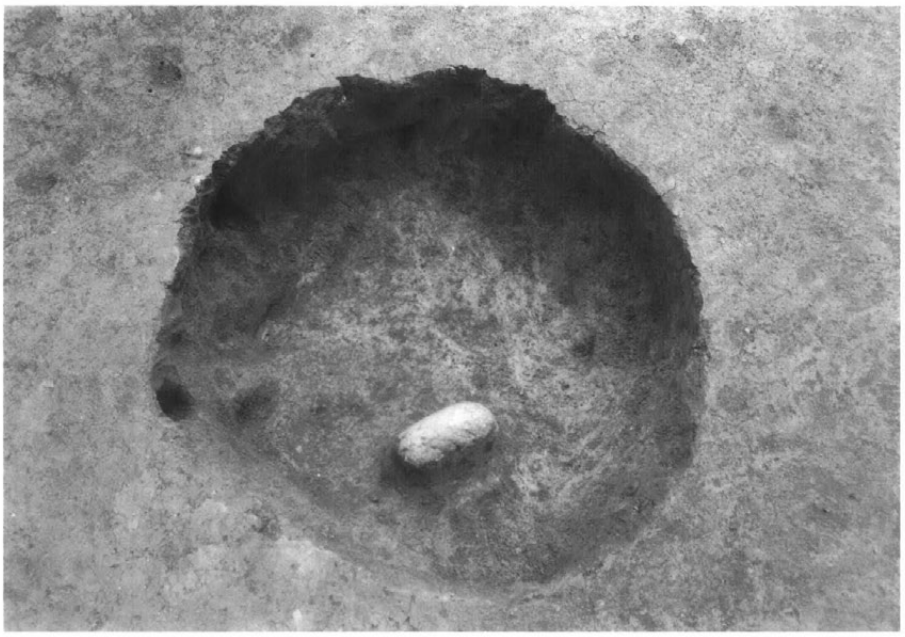
住居址04



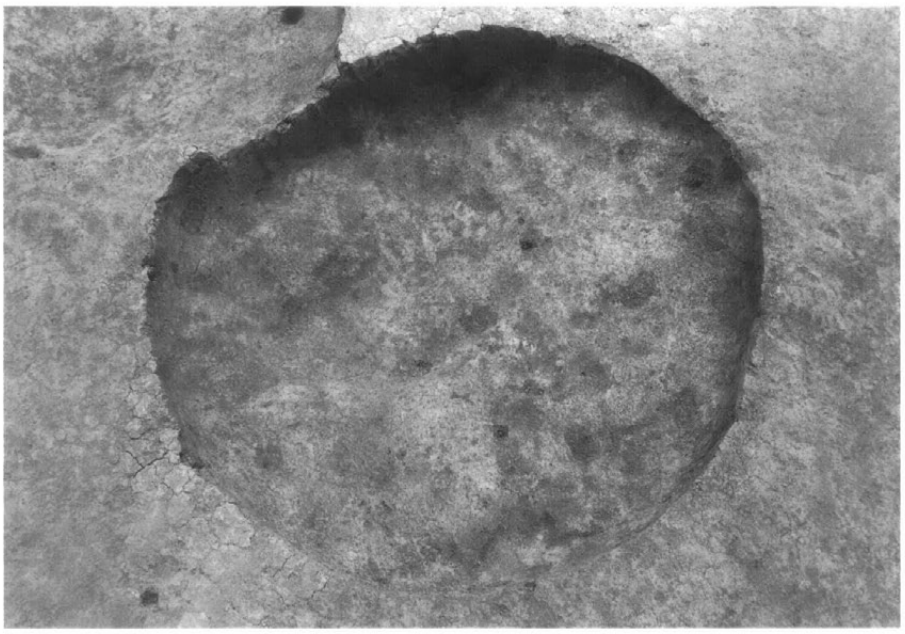
住居址05

土坑13

図版 4



土坑16



土坑17

土坑27

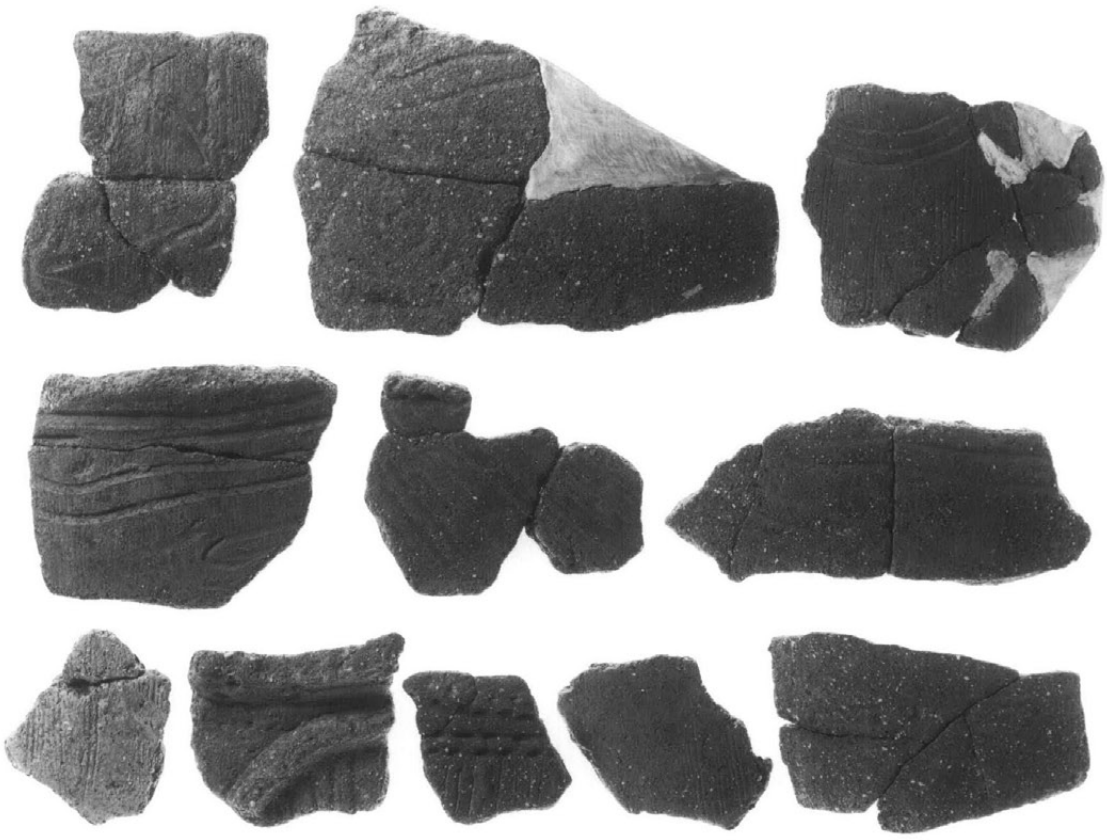
調査風景

現地見学会

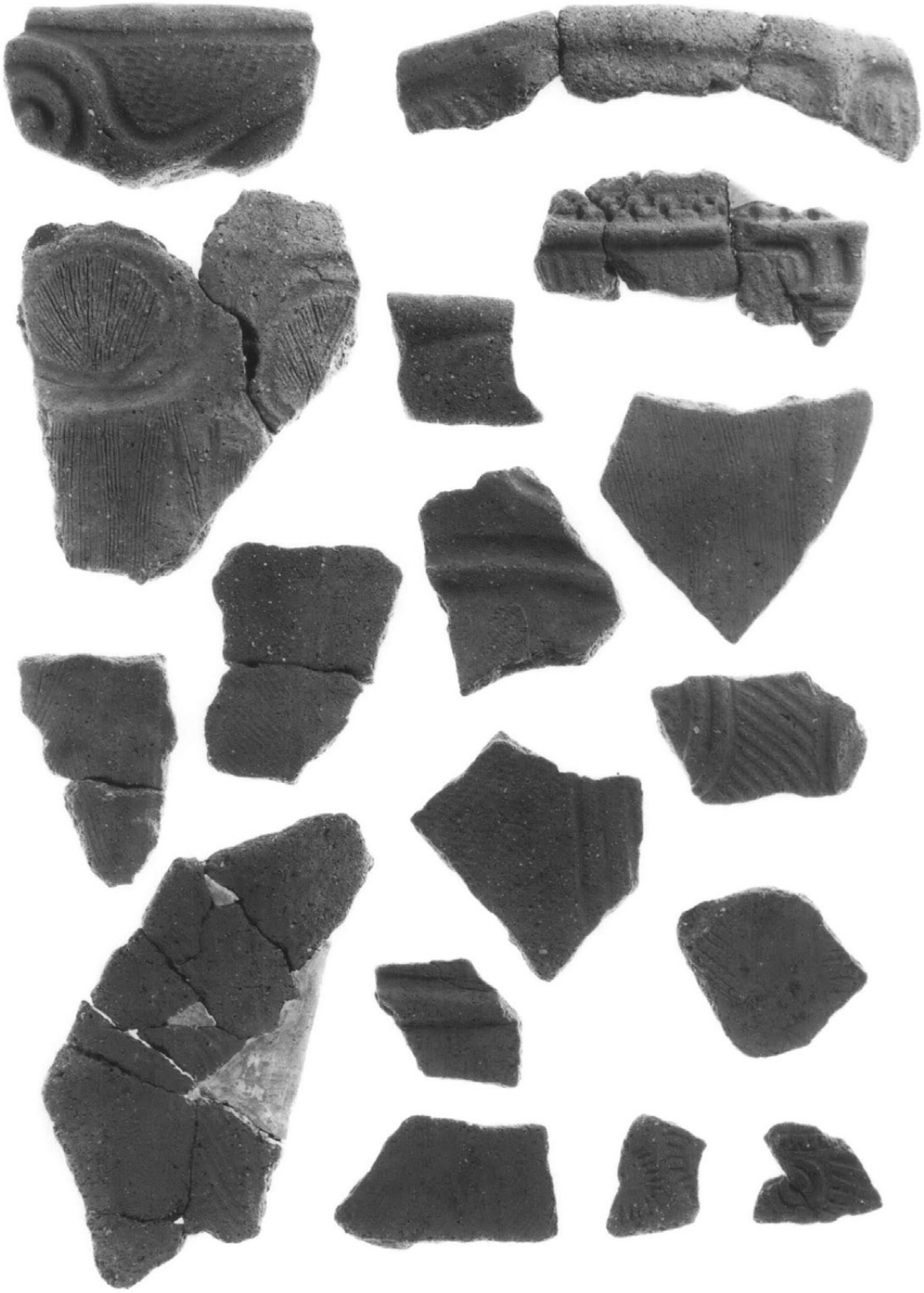
現地見学会

左上：住居址02
右上：住居址04
左下：住居址04　埋甕

住居址02　土器（1）

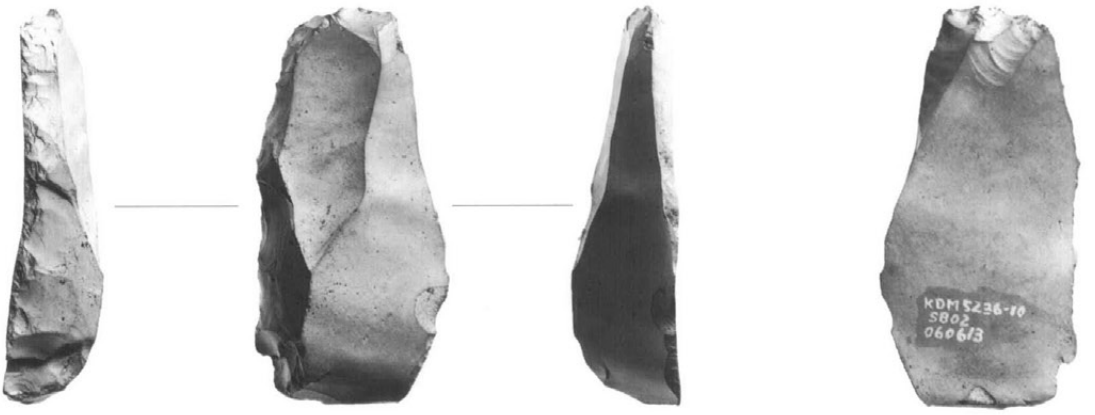


住居址02　土器（2）



住居址04　土器

住居址03　土器

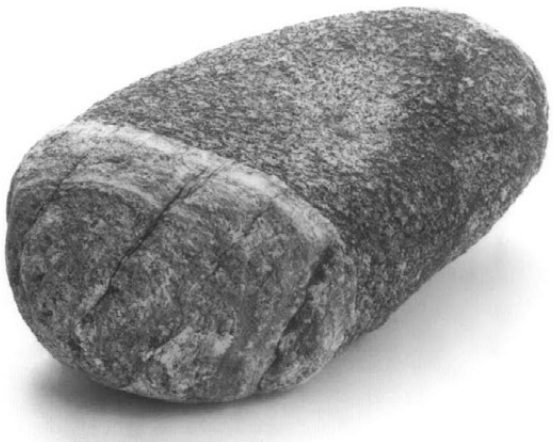


住居址02　出土　彫器

住居址02　石器

住居址04　石器

住居址05　石器



土坑13

報告書抄録

ふりがな	かわじだいみょうじんばらいせき
書名	川路大明神原遺跡
副書名	個人住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
編著者名	下平博行
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395-0053　長野県飯田市大久保町2534番地　TEL 0265-22-4511
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かわじだいみょうじんばらいせき 川路 大明神原遺跡	いいだしかわじ 飯田市川路	20205	35度 26分 07秒	137度 48分 58秒	平成18年6月2日から平成18年7月3日	126.3㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川路 大明神原遺跡	集落	縄文中期	住居址4軒 土　坑24基	旧石器時代彫器 縄文時代土器 石器	縄文時代中期後半 集落の一部

報告書要約

縄文時代中期後葉の集落の一部を調査した。今次調査によって、川路大名神原遺跡の当該期集落が段丘縁部の西側一帯に直線的な展開を見せることが判明した。

川路大明神原遺跡

―個人住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―

2008年3月31日　発行

編集・発行　長野県飯田市大久保2534

飯田市教育委員会

印　　刷　杉本印刷株式会社